

PRAEVIDENTIA DAILY (10月23日)

昨日までの世界：雇用統計後は欧州通貨が大幅高、ドル/円の下落は小幅に

昨日は、米非農業部門雇用者数の予想比下振れ（市場予想+18.0万人に対して実績+14.8万人、）を受けて、米長期債利回りの大幅低下、米株高と共にドルが対主要通貨で全面安となった。ドルは対欧州通貨で最も下落率が大きく、ユーロ/ドルは年初来高値を更新し2011年11月以来の水準となる1.3792ドル、ポンド/ドルは今年10月初の高値に迫る1.6248ドルへ上昇、ドル/スイスフランは年初来安値を更新、昨年2月の安値に迫る0.8940フランへ下落した。ドル/円は欧州時間にかけては週明けからの自律反発が続き98.40円へ強含んでいたが、雇用統計発表後に一時97.88円へ急落した。その後、急速にドル買戻しがみられ98.48円へ反発、発表前の高値を鶴回る局面もみられたが、やはり米長期債利回り低下と全般的なドル安に押されたかたちとなり、98円丁度近辺へ再度下落、前日終値との対比では僅かな下落に留まった。

豪ドルやNZドルは、米長期債利回り低下からくる米ドル安だけでなく、弱い雇用増にも拘らず逆に量的緩和継続期待が米株高に繋がると、株高との連動性も寄与し、対米ドルで上昇した。豪ドル/米ドルは今年6月以来の0.9731ドル、NZドル/米ドルは今年5月以来の0.8544ドルへ上昇、NZドルは5月以降の下落前の水準をほぼ回復しつつある。

市場予想を下回る9月雇用増にも拘らず米株価が上昇した背景としては、量的緩和縮小開始期待の更なる後退に繋がったためとみられるが、来年3月FOMCよりも更に後ずれというよりは、一部残っている12月や来年1月FOMCでの縮小開始予想が3月予想に後ずれしているという面が強いとみられる。また、失業率は7.2%と予想比低下したこと、過去2か月分の雇用者数は+0.9万人と小幅ながら上方修正していること、などを踏まえると、米国の労働市場・景気全般は予想よりは弱かったが腰折れしている訳ではないという楽観も、株価の下落に繋がらなかった背景にあるかもしれない。

主要通貨ペアの前営業日比変化率と、連動性が高い金利・株価・商品市況の変化

	変化率	米2年金利差	米2年金利	日2年金利	米10年金利差	米10年金利	日10年金利	米株価	日株価	原油WTI	原油Brent
ドル/円	-0.1	-0.02	-0.02	-0.00	-0.09	-0.09	-0.00	+0.6	+0.1	-1.4	+0.3
	変化率	独米2年金利差	独2年金利	米2年金利	独米10年金利差	独10年金利	米10年金利	欧株価	米株価	原油Brent	西欧の対独株価
ユーロ/ドル	+0.7	-0.01	-0.03	-0.02	+0.04	-0.05	-0.09	+0.4	+0.6	+0.3	-0.03
	変化率	英米2年金利差	英2年金利	米2年金利	英米10年金利差	英10年金利	米10年金利	英株価	米株価		
ポンド/ドル	+0.6	-0.03	-0.06	-0.02	-0.01	-0.10	-0.09	+0.6	+0.6		
	変化率	豪米2年金利差	豪2年金利	米2年金利	豪米10年金利差	豪10年金利	米10年金利	世界株価	米株価	中国株価	CRB
豪ドル/米ドル	+0.6	+0.04	+0.02	-0.02	+0.11	+0.03	-0.09	+0.0	+0.6	-0.8	-0.2
	変化率	NZ-米2年金利差	NZ2年金利	米2年金利	NZ-米10年金利差	NZ10年金利	米10年金利	世界株価	米株価	中国株価	CRB
NZドル/米ドル	+0.7	+0.03	+0.01	-0.02	+0.10	+0.01	-0.09	+0.0	+0.6	-0.8	-0.2
	変化率	米加2年金利差	米2年金利	加2年金利	米加10年金利差	米10年金利	加10年金利	世界株価	米株価	原油WTI	CRB
米ドル/加ドル	-0.2	+0.01	-0.02	-0.03	-0.02	-0.09	-0.07	+0.0	+0.6	-1.4	-0.2

(注) 為替相場、株価および商品価格は前営業日比変化率、金利は前営業日比変化幅(%ポイント)。

なお、昨日分当レポートで示した過去の雇用統計後の主要通貨ペアの変動率(NFP下振れ分)と昨日の実際の変動率を比較すると(下表を参照)、ポンドやユーロの対ドルでの上昇や、メキシコペソの対円、対ドルでの上昇、そしてドル/円の下落が小幅に留まることも想定通りとなった一方、豪ドルの大幅上昇が想定外だった。

米雇用統計発表日の主要通貨ペアの前日比変動率(平均値、NY引け値ベース)

	USD/MXN	AUD/JPY	USD/JPY	CAD/JPY	AUD/USD	USD/CAD	NZD/JPY	NZD/USD	EUR/JPY	EUR/USD	GBP/JPY	GBP/USD	MXN/JPY
NFP下振れ(2011年以降)	+0.01	-0.38	-0.24	-0.52	-0.13	+0.30	-0.19	+0.06	-0.22	+0.03	-0.07	+0.18	-0.25
NFP下振れ(2012年以降)	-0.39	-0.51	-0.39	-0.64	-0.11	+0.26	-0.20	+0.19	-0.10	+0.29	-0.13	+0.28	+0.01
NFP下振れ(2013年以降)	-1.33	-0.13	-0.11	-0.09	-0.02	-0.01	+0.19	+0.29	+0.37	+0.46	+0.56	+0.70	+1.23
今回	-1.14	+0.52	-0.05	+0.13	+0.57	-0.17	+0.67	+0.70	+0.69	+0.73	+0.50	+0.55	+1.10

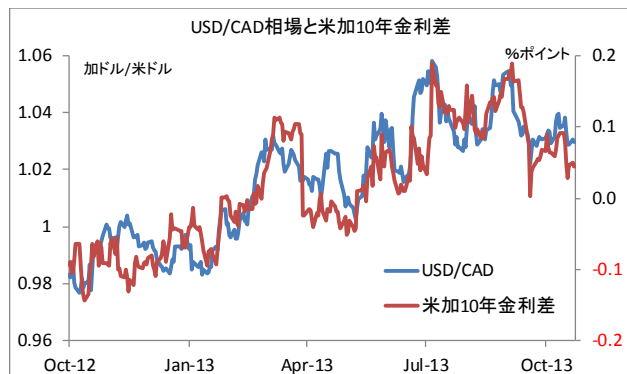
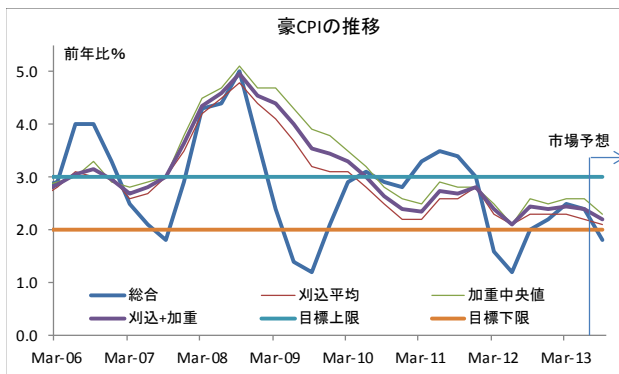
きょうの高慢な偏見：豪 CPI 下振れは豪ドル押し目買いの機会に

本日の相場材料としては、①豪 3Q 総合 CPI (9:30、前年比：前期+2.4%、市場予想+1.8%)、同コア CPI (刈込平均：前期+2.2%、市場予想+2.1%、加重中央値：前期+2.6%、市場予想+2.3%)、②BoE 議事要旨 (20:00)、③カナダ中銀金融政策決定 (23:00、市場予想は 1.00%で据え置き) および Poloz 総裁記者会見 (0:15)、④Linde スペイン中銀総裁発言 (2:30)、などが予定されている。

ドル/円は、結果的に雇用統計後の下落が小幅に留まったため底堅い面がある一方、米 10 年債利回りは 2.5%へ、9 月初のピークと比べ 0.5%ポイントも低下しているなど、積極的に買い進めるのも難しく、98 円台前半を中心としたレンジ観が強まるだろう。またドル/円は 7 月以降レンジ相場が続いていることから、豪ドル、NZ ドルや欧州通貨と比べ投機筋の注目度は更に低下してくるとみられる。

豪 CPI は市場予想比で上振れ/下振れいずれの場合でも大きく豪ドルを上下させるとみられる。今回は昨年 7 月の炭素税導入による CPI 押し上げの影響が剥落することから前年比で大きく伸び率が低下することが予想されているが(下図を参照)、市場予想比上振れの場合は、最近後退している RBA 利下げ期待を更に後退させ、まだ一部に残っている年内追加利下げ期待を後退させるかたちで、豪ドル押し上げに寄与するだろう(コンセンサスは既に今後追加利下げなしとなっている)。他方、下振れの場合、特に総合指数は予想が既に前年比+1.8%と RBA のインフレ目標レンジ(前年比で 2.0-3.0%)の下限を下回っていることから、一時的に豪ドル売り圧力を強めるだろう。但し、今回の前年比 CPI の下押しは一時的とみられており、現時点では総合 CPI 前年比は今年 10-12 月期に+2.2%へ、来年 4-6 月期には+2.6%へ加速する見込みとなっていることから、再び市場の利下げ期待を強めるには、豪景気見通しの明確な悪化が必要となる。現時点ではそうした事態は起きていないため、CPI 下振れで豪ドルが下がる場合には、豪ドル押し目買いの機会として捉えたい。

カナダ中銀は量的緩和を行っておらず、政策金利も来年後半まで据え置きが予想されている中、目先は金融政策見通しの変化がカナダドルを大きく動かす可能性は小さい。米政府機関一部閉鎖を受けた米景気見通しの下方修正の可能性が、カナダ中銀によるカナダ景気見通しの下方修正に繋がる可能性があり、カナダドルの若干の下押し要因となるが、まさに米国の景気見通し悪化が理由となる場合、米国とカナダのコントラストはあまり大きくないことから、米加金利差には大きく影響を与えにくいだろう。米ドル/カナダドルは米加中長期金利差と密接に連動しているが、変動幅は小さい(下図を参照)。



ディスクレイマー

当資料は情報提供のみを目的として作成されたものであり、金融商品の売買や投資など何らかの行動を勧誘するものではありません。

ご利用に関しては、全てお客様自身でご判断下さいませようよろしくお願い申し上げます。

当資料は信頼できると思われる情報に基づいて作成されていますが、当社はその正確性を保証するものではありません。内容は予告なしに変更することがありますので、予めご了承下さい。

当資料は著作物であり、著作権法により保護されています。全文または一部を転載する場合は出所を明記して下さい。当資料は購読者向けに送付されたものであり、購読者以外への転送を禁じます。